

進路決定自己効力を高める経験についての一考察

—Banduraの自己理論の観点から—

A Study of experience to enhance the Career Decision-making Self-efficacy — From the viewpoint of Bandura's Self-efficacy theory —

奥田 奈津子

跡見学園女子大学

人文科学研究科

臨床心理学専攻

Natsuko Okuda

Atomi University Graduate School
of Humanities Division of Clinical
Psychology

松寄 くみ子

跡見学園女子大学

文学部臨床心理学科

Kumiko Matsuzaki

Atomi University Faculty of
Literature Department of Clinical
Psychology

山口 豊一

跡見学園女子大学

文学部臨床心理学科

Toyokazu Yamaguchi

Atomi University Faculty of
Literature Department of Clinical
Psychology

要 約

今日、若者をめぐる就職状況は佳境を迎えている。そこで、本研究では、大学生の「進路決定自己効力」に注目し、現在に至るまでの進路にかかわる経験の有無、またその内容による影響を、Bandura（1977）の自己理論で提唱されている4つの情報源（行為的情報、代理的情報、言語的説得の情報、生理的喚起の情報）の考え方を踏まえ、検討することを目的とした。大学生男女198名を対象に質問紙調査を行い、「進路選択に対する自己効力尺度」による測定と、進路決定に影響を与えたと思われる経験について、自由記述にて回答を求めた。その結果、まず進路決定に関わる経験があるとした者は、自由記述をもとにネガティブ経験群、ポジティブ経験群、経験なしに分けられた。それらの群間で「進路決定自己効力」の得点を比較したところ、ポジティブ経験群、経験なし、ネガティブ経験群の順に有意に高くなっていることが明らかとなった。また、自由記述の内容から、「進路決定自己効力」の高群と低群では、低群に行為的情報、言語的説得の情報が少ないことが分かった。全体としては、生理的喚起の情報が多く得られることが分かった。以上から、「進路決定自己効力」は、Bandura（1977）の自己理論で提唱されている4つの情報源にかかわる経験をしていると高くなり、反対に挫折・混乱・不安といった4つの情報源を阻害する経験がある場合、経験の無い者よりも「進路決定自己効力」は低くなることが分かった。キャリア教育を考える際には、これらの経験をしている者達への支援を行うことが必要になってくるといえる。

【Key Word】 進路決定自己効力，自己理論，進路選択，キャリア教育

1. 問題

今日、新規学卒者のフリーター志向の広がり、若年無業者の増加、若年者の早期離職傾向などが問題となっている。その背景として、産業や経済の分野の構造的な変化、また学校教育と職業生活との接続が不十分であることなどが指摘されている。

そこで、文部科学省は2011年1月に答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を公表し、キャリア教育の重要性を強調している。この答申の中で、これまで「4領域8能力」と呼ばれていた「キャリア発達にかかわる諸能力（例）」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2002）を新たに「基礎的・汎用的能力」と定義し直している。

その具体的な内容としては、“仕事に就くこと”に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理されている。

これらの能力は、包括的な能力概念であり、相互に関連・依存した関係にあるという。そのため、特に順序があるわけでもなく、すべての人が均一に、あるいは同程度に身につけるべきものではないとされている。程度については、個人の属する地域・社会、発達段階によって異なるものとされる。

以上のことから、「基礎的・汎用的能力」を一人一人の個性に基づき、包括的に養っていくことが、キャリア教育において重要であるとされたのである。

また、これとは別にBandura（1977）が

提唱した自己効力を、進路関連領域の研究に取り入れたキャリア・セルフエフィカシー研究の中に、「進路決定自己効力」というものがある。これは、Taylor & Betz（1983）によって提唱されたもので、個人が進路を選択・決定するにあたり、必要な課題を成功裡に達成できるという信念のことである（Betz，2001）。

「進路決定自己効力」を測定する尺度には、Taylor & Betz（1983）の作成したCareer Decision-Making Self-Efficacy Scale（略称CDMSE）がある。Betz（2001）によれば、この尺度を構成する上で基礎となったのは、(a) 目標選択、(b) 自己認識、(c) 職業情報の収集、(d) 将来設計、(e) 課題解決、の5つの進路選択行動を促進するコンピテンスであるとされる。

これらは前述したキャリア教育で重要とされた、「基礎的・汎用的能力」で想定されている能力との共通点も多い。よって、「進路決定自己効力」を養うことは「基礎的・汎用的能力」を養うことと同義であり、測定可能な「進路決定自己効力」は、キャリア教育やキャリアカウンセリング実践の評価指標として期待されるものである（富永，2008）。

富永（2008）によると、これまでの「進路決定自己効力」に関する研究の内容は、①「進路決定自己効力」の評価・測定尺度の研究、②進路選択に関わる要因との関連を検討した研究、③「進路決定自己効力」を高める方法についての研究の大きく3つに分類できるとされている。以下ではこの3つをまとめ、各々の研究で得られた見解と、残された課題について概観していく。

まず第1に「進路決定自己効力」の評価・

測定尺度の研究である。これらの研究の多くは、前述したCDMSE (Taylor & Betz, 1983) を参考に、新たな尺度を作成・検討するものであり、わが国でもいくつか行われている(浦上, 1995; 古市, 1995; 富安, 1997a; 富永, 2000他)。

これらの研究によって作成された尺度の中でも、わが国の研究で最も多く使われているのは浦上(1995)の作成した“進路選択に対する自己効力尺度”である。この尺度は大学生を対象として作られ、効力感尺度(浦上, 1994)、職業不決断尺度(浦上, 1995)との相関やSCTへの反応との関連から十分な妥当性が示されている(浦上, 1995)。

また、この尺度を参考に大学生、高校生など対象ごとに新たな尺度の作成も行われている(安住・足立, 2004; 川崎, 1999, 2000; 児玉・増田・戸塚, 2002; 下村, 2000他)。ただし、浦上(1995)尺度以降の研究では、それぞれが独自に項目を作成、追加しており、特徴も異なるために研究結果の共有ができないのが現状である(富永, 2008)。

第2には、進路選択に関わる要因との関連を検討した研究がある。Betz & Luzzo (1996) は、これまでの研究では、キャリア未決定との強い関連が明らかにされてきたことを示している。

また、進路成熟との関連も指摘されている。例えば、日本では長岡・松井(1999)が、職業的進路成熟態度との間に正の相関があることを示し、三後・金井(2003)は、高校生の進路選択過程において、キャリアの見通しを持つことが重要であると指摘している。さらに、加藤・内藤(1991)は、

児童・生徒の進路発達には、親の働く姿や、職業への熟知の程度が少なからず影響を与えることを明らかにしている。

他にも、自己効力の特性に着目し、進路選択行動との関連を扱った研究としては富安(1997b)、富永(2000)、児玉他(2002)がある。これらの結果から、「進路決定自己効力」は進路選択行動を予測することが明らかになっている。

また、その性差についても検討されているが、廣瀬(1998)のレビューでは、結果の一貫性の無さが指摘されている。例えば、わが国の研究では性差が見られなかったもの(安達, 2001; 長谷川, 1995, 1999; 富安, 1997a)と、男子が有意に高いことを示した児玉他(2002)の研究と、女子が有意に高いことを示した松井・奈良井(2001)、富永(2004)の研究があり、一貫した結論は出ていない。

このことについて、教育的背景や社会化のプロセスが類似している男女では、同程度の「進路決定自己効力」を発達させる(安達, 2001)、性別そのものではなく、性役割態度が「進路決定自己効力」と関連する(Arnold & Bye, 1989)という指摘もあり、個人の家庭環境や、社会文化的な視点からの検討が必要であるといえる。

そして、最後に「進路決定自己効力」を高める方法についての研究がある。これまでの研究で「進路決定自己効力」がキャリア未決定、進路選択行動などと有意な関連を持つことが明らかにされており、その介入が進路選択者の抱える問題への改善へとつながる可能性が高いと考えられるようになった。

そこで、現在では「進路決定自己効力」を

高めさせるようなカウンセリング介入の評価に焦点が当てられている (Betz, 2001)。わが国では、大学生を対象とした介入によって、「進路決定自己効力」の下位尺度得点に、有意な高まりが認められている (三村・白石, 2001; 長岡・松井, 2001)。

その一方で、介入の効果が支持されない結果を示すものもいくつかある (浦上, 1996; 川崎, 2000; 高良・金城, 2001; 笹谷・小川, 2002他)。

これらの結果について富永 (2008) は、今後、介入条件 (情報源がどのように提供されたのか、認知的要因の修正を行ったか否か、実験以外の経験、質問紙や興味検査といった測定具そのものの実施効果、介入の時間や頻度など) についてのさらなる検討と、被験者側の条件 (レディネス、能力、態度など) の統制が必要であると指摘している。

2. 目的

これまでの研究は、対象を大学生、高校生、中学生といった段階ごとに分けた調査・実験が主である。そのため「進路決定自己効力」を考える際に重要である、発達の視点からアプローチされた研究は数少ない。

また、「進路決定自己効力」はBandura (1977) の提唱した自己効力を、進路関連領域に取り入れたものである。ならば当然、一般的な自己効力の発達との関連も考慮する必要があるが、そういった研究も多くはないのが現状である。これらのことについては、富永 (2008) も指摘しているところである。

そこで本研究では、Bandura (1977) の

自己理論の中で提唱されている、自己効力の形成に影響を与える4つの情報源に注目した。4つの情報源とは行為の情報 (実際に所与の課題をやってみる)、代理的信息 (他者が課題を遂行するのを観察する)、言語的説得の情報 (言葉による説得、自己暗示)、生理的喚起の情報 (生理的な反応の変化を経験する) のことであり、これらが適切に与えられることによって自己効力は変容するという考え方である (竹綱・鎌原・沢崎, 1988)。この考え方を踏まえ、現在に至るまでの進路にかかわる経験の有無が、「進路決定自己効力」に影響を与えるのではないかと、またその内容によって「進路決定自己効力」に差が出るのではないかとという仮説を立て、発達の視点から調査、検討することを目的とする。

また、本研究は富永 (2008) の分類に基づく。そして、進路選択に関わる要因との関連を検討した研究であるとともに、「進路決定自己効力」を高める方法についての研究への足がかりともなるものである。

3. 方法

(1) 調査対象者

A大学・B大学の学生男女193名 (全配布数198件のうち、無記入等5件を除く)

(2) 調査時期

2013年6月下旬～7月中旬

(3) 実施方法

質問紙法 (有意抽出・縁故型) を使う。質問紙は質問項目と自由記述からなるが、本研究ではそのうち、「進路決定自己効力」の高群と低群における自由記述の内容

の検討・考察を行う。そのため、「進路決定自己効力」の測定尺度と自由記述のみ記載する。

① 「進路決定自己効力」を浦上(1995)による進路選択に対する自己効力尺度で測定する。回答は「全く自信がない」から「非常に自信がある」までの4段階評定であり、合計30項目。

② 進路決定に影響を与えたと思われる経験を、小学校、中学校、高等学校、大学、その他（浪人期、大学以降など）の各時期について自由記述してもらう。また、その中でどの時期の経験が1番自身の進路決定に影響を与えたと思うのか、1つを選択してもらう。1つを選択してもらう理由としては、時期の特定と、自身の認識を確認するためである。認識が欠如していることはすなわち、たとえいくつか進路決定に影響を与えたと思う経験をしたとしても、それが自身とは無縁であると感じていることにつながる。よって、本研究では、時期の選択の無い者は経験の無い者と同義であるとする。

これらを集計し、まず経験の有無が「進路決定自己効力」に与える影響を検討し、次に「進路決定自己効力」の高群、低群の自由記述から「進路決定自己効力」に影響を与える経験を、SPSSを用いて分析する。

4. 結果

(1) 調査対象者の属性

対象者の性別は、193名中「男性」26名(13.5%)、「女性」167名(86.5%)であった。

次に学年は、193名中「大学1年生」76名(39.4%)、「大学2年生」50名(25.9%)、

「大学3年生」46名(23.8%)、「大学4年生」12名(6.2%)、「その他(大学院生)」9名(4.7%)であった。

(2) 尺度得点

進路選択に対する自己効力尺度の得点の全体の平均値は72.09点(SDは13.95)であった。得られた得点の範囲は32点から108点であり、その中間が70点であるため、全体としては中程度よりやや高い「進路決定自己効力」を持つことを示しているといえる。

性別で見ると「男性」75.62点、「女性」71.54点であり、男性の方が若干高いものの、その差はほとんど無いといえる。

また、学年で見ると「大学1年生」70.68点、「大学2年生」70.38点、「大学3年生」71.22点、「大学4年生」83.33点、「その他」82.89点であった。これについては、特に「大学4年生」、「その他」で得点が高くなっているが、大学4年の時期は就職活動のように具体的な進路選択を迫られる時期であること、大学院への進学は殆どの者が目的を持って行っていることが関連しているといえる。しかし、これらの人数の合計は全体の10%程度であることを考慮すると、その妥当性については疑問が残り、それが有意であると断定するには十分な証拠が得られなかった。よって、本研究ではこの2つの要因は考慮せずに、研究結果を検討する。

以降の分析を行うに際し、各尺度で測定された得点の平均値を元に「進路決定自己効力」の高群と低群を設定した。ここでは、進路選択に対する自己効力尺度の全体の平均値72.09点を基準に、それよりも高

表1. ポジティブ経験群・ネガティブ経験群・経験なしの各群における「進路決定自己効力」の分散分析結果

		N	平均値	SD	F値(df)	多重比較
進路決定自己効力	経験なし	89	70.42	12.75	11.62**	経験なし<ポジティブ経験群*、経験なし<ネガティブ経験群*
	ポジティブ経験群	85	76.31	11.88		ポジティブ経験群>ネガティブ経験群**
	ネガティブ経験群	19	61.05	13.95		

** $p<.01$ 、* $p<.05$

い得点（73点以上）を持つ者を高群（99名）、低い得点（72点以下）を持つ者を低群（94名）とした。

（3）進路決定に影響を与えたと思われる経験と「進路決定自己効力」との関係

調査の結果、経験のあるとした者は193名中104名（53.9%）で、経験の無いとした者は89名（46.1%）であった。なおこの際に経験があるとした者は、自由記述において、“各時期の経験の中で今考えている進路決定に一番関係していると思うもの”について、いずれかの時期に選択のあった者である。ただし、経験があるとしたものの中には、自由記述の内容に失敗・挫折・混乱・不安といったネガティブな経験や、何となく、というように具体的経験の記述がなされていない者も含まれていることが見てとれた。前述したBandura（1977）の自己理論の中で、自己効力は4つの情報源（行為的情報、代理的情報、言語的説得の情報、生理的喚起の情報）の影響を受けるとされているが、そのうち行為的情報とは、すなわち成功体験を積むことである。つまり、反対に失敗・挫折経験がある場合、自己効力の低下を招く可能性があるのである。他に、生理的喚起の情報とは、すなわち自身の生理的反応の変化のことであ

る。気分の高揚は自己効力の上昇を促進するが、混乱・不安のような状態では自己効力の低下を招くと考えられる。また、もちろん4つの情報源が適切に与えられていない場合も自己効力が高まるとは考えにくい。

そこで、進路決定に影響を与えたと思われる経験があるとした者の自由記述の内容を吟味し、各時期の中でより最近の経験が、失敗・挫折・混乱・不安といった経験のみである、または4つの情報源の提供がなされていない者を19名抽出した。これらの者達をその否定的特徴からネガティブ経験群とし、それ以外の者達を対義的にポジティブ経験群とした。よって、経験があるとした者104名をネガティブ経験群19名（9.9%）とポジティブ経験群85名（44.0%）に分け、それぞれと経験の無い者89名（46.1%）の「進路決定自己効力」の高低との関係を、1要因3群の分散分析を用いて検討した。その結果、 $F(2, 190)=11.62$ 、 $p<.01$ で、ネガティブ経験群、ポジティブ経験群、経験なしの間に差があることが分かった（表1）。

そこでさらに、どの群間で差があるのかを検討するため、Tukeyの方法で多重比較を行った。その結果、ネガティブ経験群、ポジティブ経験群、経験なしのどれも有意

小学校

行為的情報 (計8、H6、L2)

- ・サッカーをやっていたので、将来の夢は体育の先生。
- ・エレクトーンをやっていたのでエレクトーンの先生になりたかった。

代理的情報 (計14、H10、L4)

- ・エアライン系のドラマを見て憧れをもつ。
- ・親が教師だったので、自分も先生になりたいと思っていた。
- ・小さい頃に祖母の病院で働く看護婦さんを見た影響で。

言語的説得の情報 (計4、H4、L0)

- ・親に薬剤師になるのが良いとすすめられた。
- ・母親に言われるがままに受験する。

生理的喚起の情報 (計20、H14、L6)

- ・ケーキが大好きで、ケーキ屋さんにあこがれていた。
- ・本を読むのが好きだったこともあり、小説家を目指していた。
- ・ゲームが大好きだったのでゲーム屋さんになりたいと考えていた。

その他 (計8、H6、L2)

- ・安定した公務員になろうと考えていた。
- ・大人になったら結婚して幸せになりたいと思ってた。
- ・中学にいければそれでよかった。

中学校

行為的情報 (計15、H12、L3)

- ・将棋が強かったので棋士になりたかった。
- ・学校の職場体験で幼稚園に行つて、幼稚園の先生になりたいと思った。
- ・文芸部に入り、投稿を始める。

代理的情報 (計19、H10、L9)

- ・夕方のニュース番組の特番で管制官の特集を見る。
- ・親が教師なので、教員になりたい(小学校の)と思っていた。
- ・カウンセラーの先生に影響を受け、カウンセラーになりたいと思った。

言語的説得の情報 (計7、H4、L3)

- ・母のすすめで国際教養科のある高校へ進学することを決める。
- ・親に医者になった方がいいと言われた。

生理的喚起の情報 (計18、H11、L7)

- ・人と関わるのが好きで、対人の職に就きたいと思っていた。
- ・歴史が好きだった。
- ・中3のときの政治経済が楽しくて、経済、経営の学部に進もうと思った。

その他 (計8、H4、L4)

- ・とりあえず幸せになれば。
- ・高校は絶対いくという思いだった。

高校

行為的情報 (計5、H5、L0)

- ・高校時代のインターシップで保育園に行き、更に子供が好きになった。
- ・友人からよく相談をうけたのでカウンセラーになりたいと思った。

代理的情報 (計19、H10、L9)

- ・テレビの影響で、法学系の学部・学科がある大学を目指す。
- ・翻訳をしている人をテレビで見て、自分もやりたいと考えた。
- ・世界史の先生がおもしろくて授業が楽しかった。

言語的説得の情報 (計15、H10、L5)

- ・担任に心理学には向いていると言われ、カウンセラーを目指そうと考えた。
- ・美術の先生の勧めで芸術学部を志す。
- ・友人に「教えるのがうまい」と言われ、何となく教師を目指すようになった。

生理的喚起の情報 (計20、H12、L8)

- ・本が好きなので図書館の司書になりたいと思っていた。
- ・歴史が好きで史学科に進もうと決めた。
- ・昔から小さい子のお世話をするのが好きで、保育士になろうと本気で考えていた。

その他 (計16、H12、L4)

- ・家からちかいので、高校は地元で。
- ・大学に進むことしか考えてなかった。
- ・人と関わるの得意ではないと思って、心理学科のある大学へ行こうと思った

大学

行為的情報 (計7、H5、L2)

- ・大学で授業を受けて、カウンセラーなど精神の病気と関わる仕事に就きたいと思う。
- ・接客のアルバイトを通して更にやりがいを感じる。
- ・塾でアルバイトをしている。将来は、子供に関わる仕事をしたいと思う。

代理的情報 (計7、H5、L2)

- ・日本語教師に出会って、興味をもった。
- ・ゼミでお世話になった教授に憧れる。

言語的説得の情報 (計3、H2、L1)

- ・未だに将来の夢ははっきりしないが、先輩の話などを聞いて銀行系を考えるようになった。

生理的喚起の情報 (計23、H14、L9)

- ・マンガが好きなので出版に興味をもった。
- ・授業やサークル活動を通じて、自分が好きなことについて分かるようになった。
- ・私服の毎日が楽しくてアパレルがやりたいと思う。
- ・パン屋でのアルバイトが楽しかった。

その他 (計4、H4、L0)

- ・一般企業で安定を目指している。
- ・半年間の海外留学により、海外に関わる仕事も視野に入れるようになった。

その他 (浪人、大学以降)

行為的情報 (計0、H0、L0)

回答なし

代理的情報 (計2、H2、L0)

- ・2浪する中で、多くの先生に出会う。

言語的説得の情報 (計2、H1、L1)

- ・親や友人にも相談したうえで、現所属大学院に進学した。

生理的喚起の情報 (計1、H1、L0)

- ・常に小学校のときの夢を追っていたら今になってしまいました。

その他 (計2、H2、L0)

- ・職はもちろん大事だが、やはり、与えられたり自ら求められた場で自分が何をするのが自分の本質かなと思う。

注) かつこ内は合計、高群 (H)、低群 (L) の人数。

図1. KJ法を参考とする自由記述の分類と内容例

差があることが分かった。このことから、ポジティブ経験群、経験なし、ネガティブ経験群の順に「進路決定自己効力」が有意に高くなっているといえる。

（４）自由記述の分析

以上の結果から、経験のある者と無い者では「進路決定自己効力」に差があることが分かった。そこで、その差異を調べるため、Bandura（1977）の４つの情報源（行為的情報、代理的情報、言語的説得の情報、生理的喚起の情報）の考え方にに基づき、「進路決定自己効力」の高群と低群の間で、各時期の自由記述の内容の検討を行った（図１）。

その結果を情報源別に見ると、行為的情報は小学校段階では習い事を通して得られており、中学校段階で得意な科目、職場体験も含まれるようになることが分かる。高校段階に入るとインターンシップ、友人関係のトラブルの解決など、その内容は多様化し、大学段階では授業、アルバイトを通して得られるものであると分かる。

代理的情報は小学校段階ではほとんどがTV、本といったメディアを通して得られており、いくらか親の影響を受ける者も見られる。中学校段階でもメディアの占める割合は大きく、それに加えて教師、親といった身近な職業モデルの存在も影響を与えるようになる。高校段階に入ってもメディアの割合が多く、また、教師から得られる者も増えている。大学段階ではメディアの割合が減り、教師から多く得られるようになると分かる。

言語的説得の情報は、小学校段階では親

によるものであり、中学校段階には親に加えて友人からも得られている。高校段階に入ると親よりも教師、友人から得られており、大学段階に入ると友人、先輩から得られるようになると分かる。

生理的喚起の情報は、小学校段階では身近にある好きなものが多くあり、中学校段階には各教科、人と触れ合うことが好きというような抽象的な概念も含まれるようになる。高校段階になると、その興味は具体的な学問、職業へと移り、趣味は少なくなる。大学段階では授業、サークル活動、アルバイトを通して得られるようになると分かる。

その他、４つの情報源に分類不可のものとして、進学重視、安定した収入、自己内省に基づく職業観の確立といったものがあつた。これらは仮説検証の段階では「経験がない」に分類しているが、参考までに記載した。

各時期で見えてみると、一貫していえることとして、生理的喚起の情報の多さがある。このことから、進路を考える際に重視されていることが自身の興味・関心のあることであることが分かる。また、高群と低群では、どちらも４つの情報源に関わる経験をしているが、低群において行為的情報、言語的説得の情報が顕著に少ない。このことは、たとえ他者の成功する姿を見て、興味のあることを見つけたとしても、それにつながる成功体験、他者からの励まし、承認が無いことを意味し、その結果自己効力の低下を招いたと考えられる。

また、時期によっては生理的喚起の情報以外にも多く得られている経験もいくつかある。小学校・中学校段階では、代理的経

験が親の他にTV、本などのメディアから多く得られている。中学校段階では行為的情報も他の時期に比べて増えており、その主な内容は習い事の他に、職場体験、部活、授業での成功体験であった。高校段階では、代理的情報、言語的説得の情報も増えており、その主な内容は教師や友人によるものである。そして、大学段階になると生理的喚起の情報が多くなり、授業、サークル活動、アルバイトによって得られている。これらは行為的情報に結びつく経験でもあるが、自由記述を見た限りではまだ、楽しい、興味があるといった生理的喚起の情報までにとどまっている。

5. 考察

本研究では、大学生の進路決定に関わる経験と、「進路決定自己効力」との関連を、質問紙調査とその後の分析を経て検討した。以下、その結果について考察を行い、同時に残された課題についても述べる。

まず、進路決定に関わる経験があるとした者を、自由記述をもとにネガティブ経験群、ポジティブ経験群、経験なしに分け、それらの群間で「進路決定自己効力」の得点を比較した。その結果、「進路決定自己効力」はポジティブ経験群、経験なし、ネガティブ経験群の順に有意に高くなっていることが分かった。このことから、進路決定に影響を与える経験の内容によって、「進路決定自己効力」に差が出ることが分かった。

そこで、その内容について検討するため、Bandura (1977) の自己理論を基に自由記述の分類を行った。その結果、「進路

決定自己効力」の高群と低群では、低群に行為的情報、言語的説得の情報が少ないことが分かった。全体としては、生理的喚起の情報が多く得られることが分かった。小・中学校段階についていえば、加藤・内藤 (1991) は、日常生活世界において親の働く姿や職業への熟知の程度が、児童・生徒の勤労観に影響を及ぼすとしており、本研究でもその見解に合致する。ただし、親の他にもメディアからの影響も多く受けていることから、メディアが進路意識へ及ぼす影響の研究も必要であるといえる。高校段階では、三後・金井 (2003) がキャリアモデルの存在、自己決定経験がキャリアへの見通しを作り、「進路決定自己効力」を高めるとしているが、本研究でも代理的情報によって「進路決定自己効力」が高められることが分かった。

自由記述の内容をまとめると、小学校段階で興味・関心を引くことをみつけ、中学校段階で学校生活の中での成功を経験し、高校段階で他者からの承認・励ましを得て、大学段階で自身の興味・関心を深めていくというプロセスを見ることができる。その間、特に中学校段階から教師の影響が大きくなり、信頼し尊敬できる教師、友人との出会いは、以降の進路決定にも影響を与えていることが分かる。尊敬できる人物に出会えるかどうかは、個人でコントロールできるものではない。しかしその機会を増やし、また行為的情報を得るという意味でも、習い事、部活動、サークル活動、ボランティア活動といった課外活動への参加は積極的に行うことが良いといえよう。

本研究をまとめると、進路決定に関わる経験が、自己効力の形成に関わる4つの情

報源に基づいたものである場合は、「進路決定自己効力」が高まることが分かった。その反対に、挫折・混乱・不安といった4つの情報源を阻害する経験がある場合、経験の無い者よりも「進路決定自己効力」は低くなることも分かった。キャリア教育を考える際には、これらの経験をしている者達への支援を行うことが必要になってくるといえる。ここで、言語的説得の情報が低群において少ないことも踏まえると、周囲の者の承認・励ましといった働き掛けが、自己効力を高める上でより重要になってくるといえる。

最後に、本研究で残されている課題について述べる。まず第1に、調査対象者の属性である。調査を行ったのはどちらも4年制の私立大学の学生に対してであり、短期大学、専修学校の学生については考慮されていない。大学生全体の傾向を示すためにも、今後は対象の属性をより幅広く網羅する必要があるといえる。

第2に、自由記述の内容の解釈である。本研究では、4つの情報源に関わる記述を想定して質問文を作成したが、その意図とは別に、職業のみの記述や、何となくといった中身の無いものもあった。これらの記述は本研究では「経験が無い」と捉えたが、詳しくその内容を問えば4つの情報源に関する経験があるとも考えられる。また、自由記述は書かれているが、“各時期の経験の中で今考えている進路決定に一番関係していると思うもの”に選択の無い者もあり、こちらも同様に「経験が無い」と捉えたが、その解釈に疑問が残るところではある。今後は予備調査を通して、より測定内容を導き出せるような質問文の作成を

心掛ける必要があるといえる。

謝辞

本論文は平成25年度跡見学園女子大学文学部臨床心理学科卒業論文をまとめたものとなります。ご協力いただいた調査対象者の皆様、B大学の講師の先生、卒業論文作成にあたりご指導いただきました松寄くみ子先生、本論文作成にあたりご助言をいただきました山口豊一先生に厚くお礼申し上げます。

文献

- 安達智子 2001 大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討—
教育心理学研究, 49, 326-336.
- Arnold, J., & Bye, H. 1989 Sex, sex -role selfconcepts as correlates of career decision-making self -efficacy. *British-Journal of Guidance and Counselling*, 17, 201-206.
- 安住伸子・足立由美 2004 女子大生の進路選択自己決定援助に関する研究—進路選択に対する自己効力尺度を用いて—
学生相談研究, 25, 44-55.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84, 191-215
- Betz, N.E. 2001 Career Self-Efficacy. In Frederick, T.L., & Leong, A.B. (Eds.) *Contemporary models in vocational psychology: a volume in honor of Samuel H. Osipow*. NJ : Lawrence Erlbaum Associates. pp.55-77.
- Betz, N. E., & Luzzo, D. A. 1996 Career assessment and the Career Decision-

- making Self-efficacy Scale. *Journal of Career Assessment*, 4, 413-428.
- 古市裕一 1995 青年の職業忌避傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- 長谷川龍彦 1995 中学生用進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み 学校教育研究, 6, 31-47.
- 長谷川龍彦 1999 中学生の自尊感情と進路選択能力の関連 進路指導研究, 19, 35-43.
- 廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.
- 加藤守弘・内藤勇次 1991 児童・生徒の進路発達に関する研究(1)―進路成熟及び勤労観における親の影響について― 日本教育心理学会総会発表論文集(33), 431-432.
- 川崎友樹 1999 職業情報の検索によるキャリア決定自己効力・キャリア不決断の変化―職業ハンドブックCD-ROM検索システムの効果測定― 悠峰職業科学研究紀要, 7, 12-21.
- 川崎友樹 2000 大学生のキャリア決定自己効力とキャリア不決断に及ぼす職業情報の効果(その1) 関西大学社会学部紀要, 31, 197-240.
- 児玉真樹子・松田敏志・戸塚唯氏 2002 大学生の進路選択行動に及ぼす自己効力及び職業的アイデンティティの影響 広島大学大学院教育学研究科心理学研究, 2, 63-72.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)
- 松井賢二・奈良井啓子 2001 中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟, 進路選択に対する自己効力との関連 新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編, 3, 363-373.
- 三村隆男・白石紳一 2001 大学における体験活動を取り入れた進路授業の進路決定自己効力に関する研究(1) 上越教育大学研究紀要, 21, 65-75.
- 文部科学省 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(中央教育審議会答申) <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf> 2014年11月27日アクセス
- 長岡大・松井賢二 1999 大学生における進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連 進路指導研究, 19, 10-17.
- 長岡大・松井賢二 2001 大学生の進路選択に対する自己効力と進路(キャリア)成熟 進路指導研究, 20, 11-20.
- 三後美紀・金井篤子 2003 高校生の進路選択過程における自己決定経験とキャリアモデルの役割 経営行動科学学会年次大会: 発表論文集(6), 135-139.
- 笹谷聰史・小川亮 2002 進路指導における情報教育的な授業実践: 高校生の進路選択への自己効力を発表活動のなかで高める試み 日本教育工学会第18回大会講演論文集, 497-498.
- 下村英雄 2000 自己分析課題がコンピュータによる情報検索及び進路選択に対する自己効力に与える影響 進路指導研究, 20, 9-20.

- 高良美樹・金城亮 2001 インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす結果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として— 琉球大学法文学部人間科学科紀要人間科学, **8**, 39-57.
- 竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, **36**, 172-184.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- 富永美佐子 2000 女子大学生の進路選択過程における自己効力 進路指導研究, **20**, 21-31.
- 富永美佐子 2004 高校生の進路選択過程における自己効力—進路選択過程における自己効力と学習の関連から— 東北職業能力開発大学校紀要, **15**, 95-106.
- 富永美佐子 2008 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究, **25**, 97-111.
- 富安浩樹 1997a 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, **45**, 329-336.
- 富安浩樹 1997b 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 教育心理学研究, **8**, 15-25.
- 浦上昌則 1994 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究—「進路選択に対する自己効力」の影響— 青年心理学研究, **6**, 40-49.
- 浦上昌則 1995 学生の進路選択に関する自己効力の研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, **42**, 115-126.
- 浦上昌則 1996 進路選択に対する自己効力育成のためのワークブック (ECS Workbook) 作成の試案 教育心理学論集/名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻学生自治会編, **25**, 85-94.